

「あさぢが露」私註——(一)——

石 埜 敬 子

平安中期にあれほど偉大な源氏物語を残した物語文学は、時代の流れの中でその後どのような運命を巡っていったのか、その具さな姿を知りたくて、私は毎年一作品ずつ授業に取りあげて読んでいた。今年、短大の学生には少し難かしすぎるかという疑念もあったが「あさぢが露」を取りあげてみた。戦後「在明の別」と共に漸くその存在が確認されるに至ったこの作品は、現在天理大学が所蔵するものが唯一の伝本であり、それも末尾の散佚をはじめとして、多くの読解不能箇所や脱落かと思われる部分を有しているため、研究はすぐには進まなかった。しかし、昭和二十八年の木村三四吾氏による翻刻と解説（古典文庫）のあとを受け、近年になって昭和四十七年中村忠行氏の解題で天理図書館蔵本の影印版（天理図書館善本叢書第六巻）が刊行されたのに続き、昭和四十九年には大槻脩氏によって注釈本文化され（「あさぢが露の研究」所収）、さらに翌五十年には改訂版「あさぢが露」といった具合に陸続と出版されるに至った。中でも大槻氏の業績はこの作品の普及には画期的なものであり、今後の研究はそれを基に進められていくだろうと思われる。そ

の後、大槻氏の読みに対し加藤茂氏によっていくつかの修正が提言され（『浅茅が露』の本文整理について）平安文学研究第五十四輯）、また大槻氏ご自身によっても本文改訂が試みられるなど（『あさぢが露』補遺）甲南国文 第二十三号）着実に研究は進められてきている。ただ何分にも残された作品そのものが不備な面を多く持っており、細かな点の読みに関しては注意深い検討が今後必要であろうし、正確な本文理解の上で立ってこそ充実した作品研究や評価がなされていくものと考えられる。本稿では大槻氏の「あさぢが露」をテキストとして学生たちと読んでいく中で、本文解釈上気づいた点、疑問に感じた点などがあつたので、それらのいくつかを報告してみたい。私意に陥りすぎた箇所もあるかと思われる。ご批判をいただければ幸いである。

（以下問題箇所は天理図書館善本叢書の影印本に示された丁数で示し、本文引用は特にことわらない限り大槻氏の改訂版「あさぢが露」によつた。傍書のある箇所は、大槻氏により原文が文意上、解釈上

の理由で整理されていることを示す)

(一)6才

殿上で一人吹きたてる三位中将の笛に目をさまされた帝の述懐である
きくままに、ゆゆしくもなりゆく笛の音かな。いかにこの人人よ
ろづにかくすぐれたるらん。父大臣とりどりに、ものの上手にい
はれしかど、かく何事にもすぐることはなかめる。これは、その
つたへにもたまさりたるほどにぞ聞ゆる。なかにも、ものの上
手にははれけん三位の中将こそ、声・けはひなども覚ゆる折折侍れ、
あまりに色をも香をも思ひ知りすぎためりし。あまりに人をも身を
もいたづらになししぞかし。(P26)

文中の三位中将に関して大槻氏は特に注をつけておられないが、原本
「なかごろ」を「なかにも」と校訂されているところから察するに、こ
の三位中将は現在笛を吹いている人物をさすと見ておられるように思わ
れる。しかしその場合、「なかにも……」以下の文章が「いはれけん」
「思ひ知りすぎためりし」「いたづらになしし」など、全て過去形で語ら
れている点ほどのように解釈したらよいのであろうか。また、父大臣た
ちよりも優っていると評価された二人の中将のうちでも、特に名手であ
るとされた三位中将は、一体誰に「覚ゆる」折があると帝は言うのか、
「人をも身をもいたづらになし」たというのは何をさしたものかなど、
多くの疑問に答えねばならなくなる。

そこで、私は、この部分の解釈として、帝が口にされた三位の中将を
現在の三位中将とは別人であると考えてはどうだろうかと思うのである

る。それはかつて帝が知っていたあるすぐれた人物であったが、「あまり
に色をも香をも思ひ知りすぎ」たために不幸にも「人をも身をもいたづ
らに」してしまったのであった。その人物は「ものの上手」という点ば
かりでなく、道心深いという点でも、現在の三位の中将からの連想を容
易なものにしているとみられるのである。「なかごろ」は

なかごろ身のなきに沈み侍りし程。(源氏・薄雲)

さしもあり果つまじかりける事につけつなかごろ物怨めしうおぼ
したる気色の。(源氏・幻)

などの用例をひくまでもなく、「過去のある一時、ひところ」の意に使
われた語であり、先の解釈でいけば原文のままの読みで不都合はない
と思うのである。

ただ、以上の読み方に問題がないわけではない。帝が思い出している
三位中将が誰のことなのか、物語の中でどのような位置を占める人物な
のか、現存本をみる限りでは皆目わからないからである。平安後期以降
の物語が概してそうであるように、この「あさぢが露」の作者も、話の
進め方、人物の登場のさせ方など、語り手として甚だ不親切なところが
多い。それがいわゆる短篇物語と同様の文学的効果をねらったものか、
創作上のきめの粗さによるものかについては、改めて考えねばならない
が、説明や紹介なしに主要人物が物語世界を歩き、読み進めてゆくうち
に、絡まった糸がほぐれるように人物関係の輪郭が明確化してくるとい
ったいわば種明かしの筋の運びは、この作品の一つの特質といつてよ
いかと思われ^{注1}。したがって、全くその場の成り行きだけで登場させら

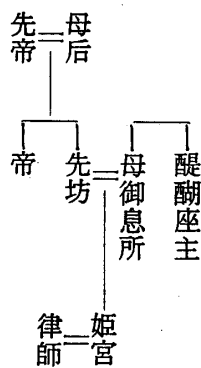
れる人物も多く、この場合の三位中将も単にそうした人物の一人と考えてよいのかもしれない。ただ、帝の思惟の中に僅かに語られた輪郭を物語の登場人物の中に探し求めてあえて推測を加えるならば、ここで三位中将と書かれている人物は「源中将」だったのではなからうか。源中将について、少くとも現存する「あさぢが露」の中では作者はさほど詳しい人物造型をしているわけではない。したがって、声、気配はもとより笛の名手であったという具体的描写はどこにもみられないのであるが、帝の寵妃である大納言典侍を盗み出し、宮廷社会を去って恋を全うした彼は、典侍との間に子供まで設けるが、典侍の死後、後を追うように子供を残したまま深く山に身を隠してしまうという、きわめてドラマティックな設定になっている。この人物は故人でもないのに実際に物語の場面に登場することはなく、常に人々の思い出の中でだけ語られるのだが、現在笛を吹いている三位中将の叔父であり、また、この場面が帝の典侍への断ちがたい思いを下敷きにしていることを思えば、笛に目覚めた帝が、そこに源中将を連想するのは自然ではなからうか。もとより「三郎の中将」とある原文をむやみに改変することは避けなければならぬが、すぐ前に「いはれけん」とあることを考えると、さかしらな書写者が「けん」を衍字と読み、かわりに、道心深いまめ人の三位中将の名を安易に書き入れた可能性を考えてみるのもおもしろいのではないかと思うのである。

〔15〕オウ

二位中将との頼みがい契りに歎く先坊の姫宮は心労の果て病に陥り、祈禱を頼みにやる場面である。古典文庫の本文をあげる。

見たてまつる人は御ものゝけなどのするにやあらん、物をおほしいるたよりにはなといひて、はゝみやす所の御せうとたいこのさすの御てしにてりつしといふ、このほときやうにはすとときよてせうそくきこえたればははしたり (P 21)

小木喬氏はこの作品の梗概を述べられた中で「折しも醍醐の座主(姫宮の兄)の弟子の律師が、京に出たついでに立寄って加持するが」(鎌倉時代物語の研究)とされたが、原文に「はゝみやす所の御せうと」とある以上、醍醐の座主を姫宮の兄とするのは無理であろう。大槻氏は頭注において「醍醐の座主は、亡き母御息所の兄に当る」(P 42)とされ、系図を次のように示しておられる。



氏のお考えに従えば、律師と姫は、座主を介しているとはいへ、全くの他人ということになる。しかし物語におけるこのような場面において、叔父の座主がいるにもかかわらず、あえて他人である弟子の律師に祈禱を依頼する考えねばならないであろうか。原文を読む限りにおいて、母御息所の御せうと醍醐の座主、とするよりも、母御息所の御せうと醍醐の座主の御弟子律師、と解釈する方が素直な理解のように

思われる。さらに、姫宮についての次のような叙述、

先坊の領じ給ひし所、この院を始めて、様様調度ども、またみゆづるべき方おはせず、したしき御ゆかりも、いづ方にもおはせず、心細き御さまなれば(21オ・P 54)

御母方とても、この律師なくては、はかばかしき人もおはせず、御乳母などやうの人も、先だち聞えにければ、心細き有様の、いとたちまちに隠れ給ひぬれば(22オ・P 56)

は、律師こそが姫宮の唯一の縁者であることを物語ってしよう。そうした関係であったからこそ、姫宮御悩の知らせに律師は駆けつけて来たのであり、姫宮も「すぎ給ひにし御形見にも、また誰をかはとこそたのみ聞えて侍るに」と頼ったのであった。なお、原表記「御せうと」とあるから、律師は必ずしも母御息所の兄になるとは限らない。兄とみればかなり年配の男性となり、弟とみれば、姫宮との年齢的距離は近づくわけで、この後展開する律師の邪恋のイメージするところが異なっており、御息所のせうとが律師である例としては、源氏物語の桐壺更衣と雲林院の律師(「故母御息所の御せうとの律師」△賢木▽)がある。

(三)18ウゝ19オ

姫宮と律師の密会を垣間見た二位中将は、悶々の思いをそれとなく知らせる文を姫に送る。安永悦子氏が「薫が匂宮と浮舟のことを察して浮舟に皮肉な手紙をやる所に似ている」(『あさぢが露』の独自性について「平安文学研究第二十一輯」と指摘された箇所である。

〔姫宮ハ〕
ひきあげて見給へるに、御返り事聞ゆべき方も覚えず、やがて引きかづき、ふし給ひぬれば

「御返り事と申せども、聞えかねて、御心地大事におはします」よし聞えつ。

その後、人目ばかりもえつくるひし給はず、いとどもの憂くて、絶え間ひさしきに、宮も、

『その後つれなくて、やうやうかれはてなん。世にながらへて、人笑はれなる名を流すべきにや』

と思すに……(P 51) (傍注は大槻氏による)

まず「御返り事……」の会話部分であるが、地の文との続きが落ち着かない。かりに大槻氏のお説のように会話体の文章の筆がそれで地の文に流れたとみたとしても、「聞えかねて」のかかってゆくところがなく、このままでは意味を解しにくいと言わざるをえない。せめて、「……聞えかねて」で句点とし、そこに姫にかわって返事をする侍女の思い入れを読みとるほどの工夫があってもよいように思われる。しかしそうした場合でも、あまりに内幕を晒した返事であり、秘密を知られてしまったことにうちふるえつつも必死で取り繕ろうとする深刻な場面における物語の常套から逸脱していると言えそうである。私は姫宮方からの返事は「御心地大事におはします」だけだったと読みたい。二位中将の文を持ち来った使者が返事をせかすのだが、返すすべもないままに、侍女は姫の御病気である旨だけを伝えたと解してはいかがであらうか。

次に大槻氏は「人目ばかりもえつくるひし給はず、いとどもの憂く

て」の主語を姫宮とされる。しかし、この場における姫宮の心境は「もの憂し」の語で表現されるものよりもはるかに深刻なものではなかったかと思われる。すぐ下に「宮も」とあるので、「いとどもの憂くて」はそのまま「絶え間ひさしきに」に続き、いずれも二位中将について言っているものではあるまいか。試みに、私案をあげると次のようになる。

ひきあけて見給へるに、御返り聞ゆべき方も覚えず、やがて引きかづき、ふし給ひぬれば、

「御返り事」

と申せども、聞えかねて、御心地大事におはしますよしを聞えつ。

その後、人目ばかりもえつくろひし給はず。

いとどもの憂くて、絶え間ひさしきに、宮も、

『その後つれなくて……』

薫の文を受け取った浮舟は、動揺する心を必死にこらえ、「所違へのやうに見え侍ればなん。怪しく悩ましくて、何事も」と書き添えて薫の手紙をそのまま返してしまふ。思いがけない浮舟の気転ある応酬に薫は内心感心し「いたくもしたるかな。かけて見及ばぬ心ばへよ」とほほ笑み、「憎しとはえ思し果てぬなめり」と草子地が語る。構想上似ているだけに、二つの作品の持つエネルギーの違いが痛感される箇所でもある。

四二三ウ

右大臣の娘、麗景殿女御の説明である。

春宮と申しし時より、女御に参り給ひにしかば、いままならびなく

て、春宮の御母にてし給ふに（P 60）

傍線部、古典文庫も「し」と読むが「春宮の御母にてし給ふに」では語法的にみて落ち着かない。「ものし給ふに」の「もの」が脱落したか「る給ふに」の誤写と考えたいが、安易な推測は慎まねばならないだろう。原本には「ら」とあり、「し」と読むにしてもかなり無理な字体である。

「し」よりもむしろ「候」の草体に近い。原本の書写は中村忠行氏の指摘にあるように64ウの十九行と二十行目をさかいらして二筆と見られる。前者は後者に比べた場合、「さふらふ」の表記に仮名を用いることが多く、漢字表記の「候」が問題箇所の前後にほとんど見えないところから「し」と読まれたものかと思われるが、36オ十二行目「御返こそし候」とや、36ウ六行目「申候つれとあいしらふ人も候はすむこにてこの御文はとりいて候つればあやしなからもちてまいりて候と申すも」に用いられた「候」の字体とは同じであり、この箇所も「春宮の御母にて候給ふに」と読んでおきたい。

字体の問題がでたので、今一つ気づいた点をつけ加える。

尾張の守具して、宵すぐる程におはしぬ。門もみなさし固めて、人静まりしけり。（36ウ・P 85）

古典文庫も「人しつまりしけり」と読む。サ行変格活用動詞と考えられたようだが、「人静まりす」といった用例は管見に入らない。原本では「し」の字は行の一番下にあり、他の箇所では書かれていない。「し」の字に比してのびやかさが無い。実はこの字ときわめてよく似た字が38ウ十一行目の一番下、40ウ七行目の一番下に出てきていて、それぞれ「か

たりきかするに」「人のけしきするに」と読まれている。「に(尔)」が行の最下位にきたときの書写者の筆癖とみて、「人静まりにけり」と読むほうが穏当ではなからうか。

(五)33ウゝ34オ

恋する院の姫宮は齋宮に立たれて手の届かぬ存在となり、先坊の姫宮にも死に別れて定まった妻もないところから、二位中将は左大臣家の大君と結婚するが、相変わらず心は慰まない。そんな年の師走のつごもり頃、方違えのために訪れた兵衛大夫のりただの家で思いがけず齋宮の面影を宿す美しい娘を垣間見、一夜の契りを結ぶことになる。しかしこの恋はたちまち大夫の知るところとなり、大夫の激しい怒りを買った。

いひまぎらはすべきかたなければ、昨夜よりの、事の有様をかたるに、

「さらにさらに承はらし。まづいまままで知らせ給はざりけるが、しりながら痴れ振舞するなど、思すことありつらん、いとたいだいしきことなり。次には、御婿取りの時、なにがしが娘ときき給ひて、召しありしに、承け引き給はざりしかば、度度いなび申してやみにしを、いまかやうに通ひ聞え給はん、聞えいみじからんにても、いと便なかるべきことなり。またすさびの御ことならんかし。憂しとても益なかりぬべし。残る隈なくおはします御心なれば、心とどめ給はんこといとかたし。また御供におはせし公達ならんに、いづれにても、なにがしをないがしろに、隠ろへ通ひ

給はん、めざましきことなり。」

などいひつづけて、このことさまたげまほしき心ありて、心づきなくいふをきくに(P79)

小木氏はこのあたりの事情について「兵衛大夫は、もともと好色でよしまな心を持ち、また自慢にしている娘を、かつて中将が拒絶したことを恨んで、この恋を妨害し、逢うことも、また文さえ通わないようにする」(『鎌倉時代物語の研究』)と述べられ、それを受けて大槻氏も梗概の中で「かつて自慢の娘を中将側が拒否したのをいまに恨んで、姫君との仲を何としても邪魔しようと考えている」とされると共に、引用した箇所に対して、「自分には内緒のまままで中納言が姫君と密通を重ねたことに対して、兵衛大夫の怒りの語気は鋭く、行数にして十行近くの長文に達する怒声である。自慢にしている自分の娘を、かつて中納言によって拒絶されたことへの恨み(中納言自身が、出逢ってみて大夫の娘の容貌を嫌って拒絶したのではなからう。何となれば、大夫の屋敷に方違えた中納言は、^B「みめよき娘もちて、ことのほかに思いあがり、かしづくなるを、この殿の渡りそめ給ひし頃も、参らせずなど、いつぞや人の語りし思ひいで給ひて、さすがにゆかしき御心にや、たちよりてか**いばみ給へば**」(六二頁)とあり、また「これや聞ゆる娘ならんと思すも、いとすさまじく、させることなき心地する」(同頁)とある。なれば、すべては父関白の采配によつたものであろう)は、いわば二の次で、大夫の心に渦巻いているのは、自分の恋慕する姫君が知らぬ間に、中納言によってうばわれてしまった事への無念、憤怒の気持であろう。

以後にも、常に中納言の逢瀬を妨害して、逢うことはおろか、文の通い路さえもさしとめる」(P79頭注)と詳しい説明を施しておられる。

しかし、両氏が指摘される「自慢の娘を中納言が拒絶云々」といった話の筋立ては、どこから巡られてくるのであろうか。物語の中に明確に措かれた箇所は見当たらないので、恐らく引用本文の傍線A、および「みめよき娘もちて……」(傍線B)の解釈に起因してくるのではないかと思われる。まずAについて考えてみる。

従来の考え方からいけば、「御婿取り」とは兵衛大夫の娘の婿取りを意味することになる。「二位中将をと願ったのだが、大夫の娘とお聞きになってご承知くださらなかった(あるいは、大夫の娘と聞いて一度はお呼びがかかったにもかかわらず結局拒否された、の意か)ので、沙汰止みになった」ということになるのだろうが、「御婿取り」「召しありしに」「度度いなび申して」の用語や敬語のあり方からみて、納得しがたいものがある。平安後期以後、敬語のあり方にある程度の変動があったことは指摘されてきているところだが、ここはやはり「召しありしに」は先方から大夫方に召しがあったの意であろうし、「いなび申して」は大夫方から先方にお断わり申しあげたという事情を語っているとみるべきであろう。とすると「受け引き給はざりし」の主語が問題になってくる。今までは「給ふ」があるために主語を相手方すなわち閔白家(あるいは二位中将自身)と考え、ために中将側が拒絶したという解釈となつて他の矛盾に目をつむらなくてはならなかった。そうではなく、この「給ふ」は、点線「承はらじ」「知らせ給はざりける」「思す」などと

同様、現在兵衛大夫が話している相手、すなわち七歳年上の、浮気をきつくいましめられ、その人が死ぬまで頭のあがらなかつた妻^{注3}に対しての敬語表現と考えたらよいのではないか。今、夫婦の間で問題となつてこの娘、じつは大夫の子供ではなかつた。大納言典侍と源中将の間に生まれた姫君(院の姫君とは異父姉妹になる)であり、三歳で母に死別、翌年には父も出家して行方不明となつたため、式部大夫の妻であつた乳母に引き取られ養われていたが、式部大夫の死後、兵衛大夫の後妻となつた乳母について、乳母の娘の式部と共に兵衛の娘のように育てられたのであつた。40オには「姫君は式部の大夫には幼くて遅れにしかば、これを後の親とのみたのみて生ひ立ち給へれば、よそなる人などは、ただ兵衛の大夫が娘とのみ思ひたるに」(P94)とある。外見はともかく、この娘の動向に対する発言権は乳母の方が強かつたのである。乳母には姫の将来を「ざりとも御身は、さて果てさせ給はじ」(38オ・P91)とする高い望みがあつた。出仕するようという話に承諾しなかつたのである。

そこで「御婿取り」であるが、以上の解釈をしてゆくと、兵衛大夫の娘の婿取りの時とは考えにくい。大夫が右大臣に出入りする者であつたことは

右の大臣も出で給ふべき御供に、のりただも参りて(30ウ・P73)
いまの右大臣殿の侍^{注4}なる兵衛の大夫といふ者を語らひてすぐし侍る

などから明らかであるが、右大臣家の娘は麗景殿の女御におさまつてし

(71ウ・P177)

まっている。これは左大臣家の大君が二位中将を婿に迎えようとした時のことを言っているのではあるまいか。恐らく二位中将と大君の結婚に際し、兵衛大夫の娘の評判を伝え聞いた左大臣家から、出仕するよう要請があったのであろう。しかしこの出仕に妻が賛成しなかったため、再三の誘いに対し大夫はお断わりをして沙汰やみになったのではなかったのだろうか。大夫風情の者が大臣家に対し出仕を断わるということは、理由はどうかかなり勇気を必要とするものではなかったかと想像される。そうした過去の経緯に加えて、大君の婿君である二位中将が娘のところに通い始めたというのであっては、大夫としてはまことに弁解のしようもなく、具合が悪いのであった。相手が二位中将ならば慰み半分のお供に決まっている、あるいは相手は二位中将ではなく方違えのお供についてきた公達の一人であったかもしれないが、どちらにしろ自分の立場を無視して（この怒りには大槻氏の言われるように姫への恋慕と嫉妬の情も含まれていたであろうが、妻の手前あらわにするわけにはいかない^{注5}）事が運ばれてしまったことに大夫は激怒したのである。

傍線Bも以上の線から解釈できる。噂にのぼっているみめよき娘とは姫のことであり、「このお屋敷の二位中将様が^{注6}大君様のところにお通いになられた頃も、せつかく出仕の話があったのに娘かわいさの余り大夫がそれをさせなかったのだ」との噂が取沙汰されていたのを耳に挟んでいたということなのであろう。

こうした事の経緯を認めれば、以後の物語の展開の理解は容易になってくる。例えば、尾張守からと偽って届けられた文中納言（年末の除

目で二位中将は昇任し、この時点では中納言になっている）からのものであると見破った大夫が

もとよりこの御ことに、口入れにくきに侍り。ともかくも御はから

ひに侍る（36オ・P 84）

と部屋を出ていってしまうのは、中納言に対する捨て台詞ではなく、妻に向けて、もともと姫の事についてはあなたのお考えしだいなのだ、と言った場面と解釈できるであろう。また姫への恋を妨害されて万策つきた中納言が、大夫の屋敷に行つて播磨守の使と偽り

承はらぬやうに聞し召せども、娘あまたあなる、一人参らせられよ

（37オ・P 86）

と持ちかけるのも、娘の出仕を断わったという事実をふまえた言葉であり、大夫が妻に、

かくわざとの御使度度になりぬ。参り給ふべきにぞ（38オ・P 90）

と説得する箇所も、過去の事情や大夫と妻と姫の関係を理解して読むべきであろうと思われる。

（六38オ

兵衛大夫の妻、姫君の乳母が病に臥す場面である。

正月十日ごろより、御乳母わづらふ。風邪にやと思ふ程に、日にまして重くなりつつ、晦^{こもり}ごろにな□ば、息とまるべくも覚えぬに

△ P 91 V

死を直前にしているのであるから「息とまるべくも覚えぬに」では意味が通らない。「息」のつく語としては「息絶ゆ」「息つく」「息通ふ」「息継ぐ」

「息詰む」「息まく」などが考えられ、この物語が直接的にもっとも多くの影響を受けたと思われる狭衣物語には「息をだにし給はず」「息の下に」「息も絶えはてぬべき」などの例をみることができ、「息とまる」といった使い方はない。「いきとまる」という動詞は普通、「憂き宿世ある身にて、かく生き止まり」(源氏・関屋)、「宮は生き止まり給はん事もかたかめり」(寢覚)などのように「生きてこの世にとどまる」意として用いられる。「あざぢが露」の引用場面も「生き止まる」と読んで支障はない。同様のことが41ウでも言えそうである。

「ひごろ例ならずおはしつる、この程すこしよろしきやうに見え給へる程に、この子の時ばかりに、にはかに絶え入り給ひぬ」

といふに、

「さりとも、けしうはおはしまさじ」

といひて、数珠押し磨りて、加持し奉る程に、しばしありて、やう

やう息いで給ひぬ。(P 96)

「さきさきもかくて生き出で給ふ折にならひ給ひて」(源氏・御法)、

「すこしづつ生き出づる心地するにしも」(寢覚)などにならない、「生き出で給ひぬ」でよいのではあるまいか。

(出)52オ一ウ

物語を読んでゆく時、会話か地の文かと迷うことがある。現代のように明確な意識のもとに書かれたのではない文章は、実際に会話体として一線を画してゆくことが難しい場合も多いのだが、会話がある以上、そ

ここでは作中人物が動き、場面を構成しているのであるから、注意深い読みによって、それらの人物、その場の情況といったものをいきいきと自らの頭の中にイメージする努力が必要になってこよう。

次にあげる場面は、満たされぬ心を抱く中納言が、ある折ふと故中務卿宮の荒れ果てた屋敷に立ち寄り、例によって内を垣間見る条である。主人らしき女を中にして四五人の女房たちが縫い物をしながら将来の不安を語り合っている。

「まことに、甲斐なき御かげに隠れてこそ、かくもおはしませ……(中略)……中宮にこそ上臈もとめさせ給ふなれ、御匣殿のうせ給ひたんなるに、参らせ奉り給へかし」
といへば、

「そればかりは、いとこのもしからず。……(中略)……ただ尼

上のいき給ひたらん限りは、手足ともなり、めあかしどもして、^{注8}

それを孝養に、よくつかはれ奉りなん」

といふをみれど、見え分かず。あやしげなるなかに、

『かれや、さは主ならん』

とみ給へば、廿四、五もやあらんとみゆる、色いと黒う、耳はさみして、髪うち結ひたる元結より下は、屏風などの心地して、うるはしからずみゆる。この集ひたるなかにまさるけぢめもやとみ給へどなし。大人だちたるもの、それはしもよく思し召したり

「この得業のことなどぞみよりにか覚ゆる」
といふなれば(P 123とP 124)

傍線「それはしもなく思し召したり」を地の文としたのでは「それはしも」が作者の感情移入となる上、「思し召す」という敬語表現が不自然である。この場面は女房Aの提案をBが否定して代案を出し、年配の女房がそれを支持していると読んだ方が全体としておもしろく、会話も生きてくる。したがって、私は、「それはしも……」は「この得業……」と共に、大人だちたる者の会話と読んでおきたい。(なお、「みみよりにか覚ゆる」の箇所、古典文庫も「か」と読むが、原本「みゝよりに」と読む。「か(可)」と「は(八)」は草体にすると間違えやすい。ここは「みみよりには覚ゆる」であろう。)

似たような問題で気づいたところを一、二つけ加えておく。いずれも垣間見の場である。

31オ

昨夜の遣戸のもとにてたちきき給へば、何も御覧じいれで、けふもふしくらさせ給ひつ。

「あはれ、年の始にいかすべきにか、かまへてこれをだになど、とりまかなふめれど、例の胸いたき折には、かくのみこそはいまやみんなん」

とぞいふなる。(P 74)

家の中にいるのは歎きに臥せる姫と乳母子の式部である。右の本文で読んだ場合、会話部分の発話者は誰と考えるべきか。姫としても式部としても落ち着きが悪い。場面の構造から言えば、ここは心配をおし隠したしっかり者の式部が懸命に姫の気をひきたてているところであり、姫が

それに応じているところであろう。右の文章からもそれを読むことは可能なのである。「あはれ、年の始にいかすべきにか。かまへてこれだに」など言いながら食事の世話など式部がとり行い、それに対して「例も胸いたき折にはかくのみこそは。いまやみんなん」と姫が答える。そんな場面を中納言は覗いていたのである。「いふめれど」「いふなる」に中納言の視点が読みとれる。

56オ

「この髪み給へ。さばかり鬘しつれども……(中略)」

とて後を任せ、つくろはずれば、

「夜なれば、何か苦しからん。いまおはしぬ……(中略)」

といふ気色、妹にやと見ゆれど、ことのほかに静まりて覚ゆ。

「向ひ居たる人人、かやうのことは、好ませ給はざりしかど、あ

りありて、さもやさしき御事かな」

「左の大臣の、さしもめでたくもてかしづき……(中略)」

などいひあへるも(P 135)

このままでは、「向ひ居たる人人」は姉妹のことになってしまふ。しかし女房たちが主人筋の人にむかってこのような言い方をするであろうか。女房たちが今夜男君を迎えるために身づくろいしている姉妹をみてあれこれ話し合っている場面である。「向ひ居たる人人」は地の文に出し、後の「いひあへる」の主語とみた方が、場面にふさわしい読み方といえるように思うのである。

注1 例えは物語冒頭に帝に讓位の意志があることが語られているが、それが

大納言典侍への思いに原因していることが説明されるのは9才であり、大納言典侍についての詳しい叙述は物語も後半の70ウに至ってやっとなされるといった具合である。こうした点については、いづれ稿を改めたい。

注2 小木氏のお考えは、はっきりわからないが、大槻氏が「自慢にしている自分の娘」とされる時、それは大夫の実の娘を意味するとお考えのようである。「子ども、兵衛の大夫にも男児一人、十二、三ばかりなるあり」(P 91)に注して、「この男児は、兵衛大夫が先妻との間に設けた子であろう。もっとも、兵衛大夫と先妻との間には、例の大夫ご自慢ではあるが、はた目にはパッとせぬ娘一人あって(六二頁)、他の妾腹に、この男児が生まれているのかも知れない」(P 91)とされる。しかし、氏が指された娘は、「廿ばかりなるが、きたなげなきが、この大人にいとよく似たるはこれや聞ゆる娘ならんと思すも、いとすさまじく……」(P 62)と描写されていて、兵衛大夫の妻、すなわち乳母によく似ているのであるから、当然乳母の連れ子である式部と考えられる。他には兵衛大夫に娘がいたことを語る箇所はなく、先に引用した「子ども、兵衛の大夫にも男児一人……」の表現からみても、兵衛には実の娘はいなかったと考える方がよいのではなからうか。

注3 74ウと75オに「この兵衛大夫は、若かりし時より、行方なく心すぎていはれしものさやうの方のしれがましさに、藏人もはなたれて、あさましく身まづしくてすぎけるに、この女は、世の渡らひ心もとながらで(「心もとながらで」か―石埜注)すぎけるに、式部の大夫うせて後、いま七八年が姉なれども、語らひつきて後は、世にもまじらひ、人人しくてすぎけるに、例の好きなどもせさせず、「いま幾世あるまじき程、我にねたき目

をみすまじくは、かくてもあるべき。さらずは、ただ世を背きなん」とのみいひければ、念じすぐすに……」(P 185~186)とある。

注4 古典文庫「いまの右大臣殿のさぶらふなる……」(P 129)と読む。原本をみるに「右大臣殿」の箇所は「の」と書いて上に太く「に」と重ね書きしてある。写本は二筆からなっているが、誤写の訂正法は、多少の相違はあるにしろ、いずれもかなり乱暴に行われている。この箇所も「の」と誤写した上に「に」と訂正したのである。したがって原本表記「さぶらふ」をいかして、「いまの右大臣殿にさぶらふなる……」と読む方がよいと思われる。

注5 注3に同じ

注6 大槻氏は「さすが兵衛大夫も、陰でこそ、あしざまに中納言を非難し得ても、身分、地位から考えて、中納言は関白の子息であり、自分は一介の兵衛大夫であつてみれば、その無念さが、よく口振りにあらわれている」(P 84頭注)「姫君に対する邪心から、兵衛大夫は、あくまで中納言の恋路を妨害するが、いざとなれば、身分、官職の違い著しく、「もとよりこの御ことに、口入れにくきに侍り。ともかくも御はからひに侍る」といはざるを得ない」(P 91頭注)とされる。

注7 「いふ」の二字剝脱、大槻氏は「仮りにいふを補う」とされる。従うべきであらう。

注8 「めあかしどもして」がわからない。安永悦子氏は「尼上を頼りにすること、即ち、頼もし人とすることを表現したことばであり、将来に導びいてくれるものの意であらうが、こうした意味の用例は源氏にもない」(「あさちが露の独自性について」平安文学研究第二十一輯)と言われ、大槻氏も、あるいは「目馴らし」の誤写か、と疑っておられる。